

### (3)講 評

○委員長 お待たせいたしました。それでは、講評をさせていただきたいと思います。

まず、新規課題のほうですけれども、やはり我々として非常に気がかりになる点は、言葉の定義、いわゆる「国家座標」という言葉が出てきたということで、この言葉の定義をきちっとしていく必要があるだろうということがありました。それともう1つは、これは非常に大きな課題で、国土地理院の過去からの流れを大きく変えるようなテーマになっていますので、測量の政策面から、これはどうするのか。ここは研究評価委員会なので、もちろん内容的なものは研究なんですね。この研究の内容について、委員の先生方からは全く異論はなくて、これは現在のデジタル化の流れ等々からすると、もう絶対進めるべきであって、よろしいのですけれども、あくまでもそこで止まっちゃうと研究として止まってしまう。そうすると、これは場合によっては測量法を変える必要が出てきたり、法制上のくくりをしなければならない。そうでないと社会実装ができない。研究で終わってしまって社会実装ができないということになると、このテーマについてはもうほとんど意味がないということなので、この社会実装をこれからどう考えていくかということを見ると、このテーマはテーマとして、別にこのテーマを実行するための政策面からの研究課題をつくるぐらいの必要性があるのではないだろうかというご意見です。研究は研究として、もちろん今のこの流れ、4次元の位置情報について研究をしていくというのは、これはもちろんこれでオーケーですけれども、これを社会実装するためには、政策面から政策面上の研究課題というようなものをつくるぐらいの大きなテーマではないでしょうか。研究にとどまらなくて社会実装するための研究課題を考える必要があるのではないのでしょうかというお話でした。要するに制度改正が必要になってくることになるのではないかとということでございます。

それともう1つ、民間GNSSの利活用ということですから、ここは民間との調整というか、関係というか、議論は進んでいるのでしょうかということをお聞きしたいということだったのですが、現状において、この民間のGNSSの基地局に関して、民間の方々とかこれについての議論はなされているのでしょうかという質問です。

○企画部長 複数の民間の事業者の方と既に複数回会合を重ねておりまして、お互い無理のない範囲できちんと意見を反映していくというふうに努力はしております。

○委員長 ということは、民間とのコミットメントみたいなものはできているというふう

に考えてよろしいわけですね。

○企画部長 ある程度できております。

○委員長 時空間の密度の不足を補うという話でしたので、これは、いわゆる民間GNSSを使うのはいいのですけれども、結局、密度が少ないところには人が余りいなくて基地局がないというような現実があったりして、そのあたり民間GNSSを使うときにどうしていったらいいのだろうかということが課題になるかもしれないという御意見でした。

それと、計画全体が4名の研究員の方で、5年間でこれだけ大きいテーマで、1人1つずつやっていくということで、昨年度も南海トラフに関する研究課題が動き出していますし、大丈夫ですかという、ちょっと御心配がありましたけれども、それはそれなりに考えられて進められているのだと思うのですが、だとすると、一つ一つのテーマを実行するために研究員の方にはかなりの労力がかかるんですけれども、この研究を推進するためには、各研究テーマの統合を積極的に進める必要があるので、各テーマの進捗もそうですが、これを統合化した、いわゆる先ほどの社会実装するためのことも考えた進捗管理みたいなものをきちっとやっていかないと、それぞれのテーマが非常に大きいので、ちょっと大変なんじゃないでしょうかというご意見がありました。これは計画されている中で、重々考えられた上でのことだと思いますけれども、先生方が、それぞれのテーマが非常に大きいので、4人で5年間というのは、はたから見ると厳しそうだな、統合化ということも議論していくとすると、これもちょっと大変かなという御意見がございました。

以上が新規開発のほうです。

後半の研究開発基本計画のほうですけれども、これは先ほどデータをいただいたばかりでございますので、これは各委員持ち帰っていただきまして、後ほどこれを見ていただいて、メール会議という形になるということでしたので、きょう幾つかの御意見も先ほどの議論の中で出てきましたので、それを踏まえて修正していただきたいのですけれども、中身の細かい点につきましては、一度持ち帰った形で、また各委員から個別に御回答をいただくというふうにしたいと思っております。

私からは以上ですが、先生方から、何か忘れた事項等ございませんか。よろしいでしょうか。

それでは、これで講評を終わりたいと思います。